



千葉大学大学院工学研究科准教授

岡田 哲史

「飛翔—地場産業復興施設(織姫の里にて)」

1962年 兵庫県生まれ
1986年 早稲田大学理工学部建築学科卒業 第9回学生設計優秀作品展出品
1989年 コロンビア大学大学院修了後、早稲田大学博士課程修了(工学博士)
日本学術振興会特別研究員、文化庁芸術家在外研修員
コロンビア大学客員研究員、(株)岡田哲史建築設計事務所代表
滋賀県立大学環境科学部助教授を経て、2006年現職に至る。

「等身大の自分を表現すること」

インタビュー：法政大学 高道 昌志/宮坂 伸平

——岡田さんはどのように学生生活を過ごしましたか？

けっこう街をぶらぶらしていたかな…。関心のある授業には出ていたけど、大学で学ぶ理窟よりも街にあるリアリティのほうに興味深かったんだと思う。ひょっとしたら、同期の人たちは僕のことあまり記憶にないんじゃないかな…。

学生生活の中で一番学んだことといえば、「暇をもてあます」ことの大切さ。いま思えば…。

暇であることって、世間ではなんか悪いことのように言われてるけど、今見えないものが、当時は確かに見えていた。

——そのことと卒業設計の関係性はありますか？

今でも鮮明に覚えているけど、当時の自分はあまり設計をやるモードではなかった。だから、まわりのみんなは卒業設計に向けてテンションを上げていくなか、僕はいつまで経っても低空飛行で、なにをやってよいか悩み続けていた…。

今だから言えるんだけど、悩んだあげく敷地や設計内容も架空の設定だった。でも、ある意味ではそれでよかったのかもしれない。周囲の人たちは卒業設計の内容に社会性のあるなしを議論したりしていたけど、不勉強な僕はどれだけコミットしていけるのか正直不安だったし、最初から無理だと諦め妙に醒めていたところがあった。若い時って変な正義感をもったりするでしょ。僕はかなり過敏だったにちがいない。大学生特有の憂鬱っていうか…。大人にもなりきれず、子供でもない自分といった…立ち位置の見えない存在に。

街をぶらぶらしすぎたのが祟ったか、たしかに何かを掴んでいるはずなのに、何ひとつ表現できないでいる自分に嫌気がさしていたんだと思う。卒業設計に対しても同じで変に醒めていた。それでも、やり始めるとなんか無心でやってしまうんだよね。

——卒業設計に対して醒めていたにもかかわらず無心でやってしまうのは大学時代に得た経験等が影響力を与えたのでしょうか？

そんな美しいものではなかったよ(笑)。試行錯誤の連続で、端からみれば泥沼を

クロールでバタバタしているって感じ…。若い時って直感だけで動いている時ってあるでしょ。でも、意外にそれってなかなか良い動きをしていることが多いんだよね。

10年ほど前から「ものの強度」とか「建築の強度」という言葉を使って、言語では表現できない何かを建築で表現したいと思うようになったんだけど、それはまさに人間の直観力に関係することで、おそらくデザインという行為の本質を突いた何かではなかろうかと考えている。言語で表現できないモノは、いかなる言語をも超越した魅力をもっている、ということなんだ。

——醒めた状態でやった卒業設計が大学内一等を取った訳ですがそこについてはどうお考えですか？

賞は相対的なものだから、たまたま周りが調子を崩していれば浮かばれるといった程度のものだよ。なにせ自分のテンションが低かったんで、自分が一番になれるなんて思ってもみなかった。

でも、それが良かったんだと思う。すごいものを作ったと勘違いして不遜になっているより、たいしたこともないのに一等をいただいてヤバイと思っているくらいの方が、同じ一等をいただいたにしても救いがあるんじゃないのかな。

——当時建築において興味を持っていたことは？

これも今だから言えるんだけど、当時建築家とか建築作品とかあまり知らなかったんだ(笑)。「不勉強にもほどがある」って御叱りを受けそうだけど、でも知らなくておおいに結構！というのは今も変わらない。周りにはホントに物知りがいて、建築に熱心な人たちの会話に僕はいつも入っていきなかった。でも、なんか、それでも良いと思っていた。今振り返ってみると、僕はいつも等身大の自分で暮らしていたんだと思う。それこそ自己合理化か…(笑)。

ともあれ、それだけは自信をもって言えるかもしれない。

——当時建築以外で興味あったことは何ですか？

今も変わらないけど、哲学は好きだった。本もたくさん読んだ。一人旅もけっこうした。それから山が好きで夏は登山、冬はス

キーと山にこもってインストラクターなんかもやっていた。小さい頃からスポーツはなんでもやっていた…。

——卒業設計では何かに鼓舞されたり、影響されたのでは無くありのままの自分を表現したというわけですか？

さっきも言ったとおり、とにかくテンションが下がりがっばなしだったので、文章書きでいえば、やるせなさや気だるさをそのままぶしつけの詩にするような調子。シナリオを緻密に組み立てたり、言葉尻に気を配ったりといったことはないに等しかった。だから後からだと恥ずかしくて読めないような何かなんだね、自分の卒業設計は。それはまるで気だるさの集積…。

——卒業設計を評価するという点についてどのようにお考えですか？

あまり意味がないんじゃないかな…。そこで良い評価を受けたからって、将来立派な建築家になるとは限らないし。評価が良くなかったからって建築に向いていないわけでは決してない。

でも、だからといってそこに夢がないわけでもない。卒業設計は他人の評価ばかりに気をとられないで、本当に自分がやりたいことをやれば良いんだと思う。

——最近では皆が一等を目指して同じカテゴリの中で競い合うことについてどうお考えですか？

教育的には「自分を鼓舞する」という意味で良いのかもしれないけど…。

人はみな、誰かに認めてもらうことで自分の存在価値を確認し成長していくでしょ。賞をいただくということは他者が自分を評価してくれるというわけで、ひとつの道標にはなるよね。ひょっとしたら、「自分ができる」と勘違いすることも実は大切で、その勘違いを他者の眼差しを借りて合理化するきっかけを与えてくれるというのが、賞のもつ最大の魅力なのかもしれないね。

——最後に卒業設計をこれから取り組む学生に一言

周りに流されることなく自分と向き合うこと。そして偽りなく等身大の自分を映し出すことだけに躍起になること。良い作品を作ろうだなんて気負わないこと。